

ふどうみょうおうぎぞうわきじとも  
不動明王座像脇侍共

種 別	小松市指定文化財 彫刻
指定年月日	昭和44年11月1日
所 在 地	小松市立博物館

本件は、像高58センチメートルの不動明王座像と、脇侍のこんから矜羯羅童子・せいたか制叱伽童子の三尊像である。

不動明王背後の火焰の光背の銘によると、元は高野山上の院東根堂に安置されていたが、後に能登の古寺に移されたという。作者は不詳だが、作風から鎌倉時代初期のものともみられ、一木造いちぼくづくりで作られている。

髪は全ての髪を左耳上に引き寄せた総髪で、そこから束ねた弁髪を左胸に垂らしている。形相は目を見開き、唇を結び、初期の不動明王像の特徴が表れている。

元は群青色に彩色されていたとみられ、条帛じょうはく<sup>(1)</sup>にわずかに色彩が残っている。また、光背、右手の剣、左手のけんさく羂索<sup>(2)</sup>、しゅみざ須弥座<sup>(3)</sup>は宝暦4年(1754)の後捕と判っている。

(1) 条帛：仏像が左肩から右脇にかけて身につける布。

(2) 羂索：縄の一端に環、もう一端に半形の独鈷杵をつけたもの。衆生救済の象徴とされる。

(3) 須弥座：仏像を安置する台座。

